情緒的安定や信頼関係の形成に非常に有効な方法といえる。SPELL アプローチが示す、共感・肯定的対応・低刺激な方法などは、二次障害のある対象者だけでなく、アスペルガー症候群の人の二次障害を未然に防ぐ支援方法のひとつとして、活用することが可能だと考える。

他方、Aの事例から明らかにしたように、二次障害だけに着目した支援には限界があり、有効な手立てとはならないと考える。

6．まとめ

Aは知的発達レベルが高く、自閉性障害のなかでも軽度のアスペルガー症候群であるため、長期間にわたり一次障害が考慮されなかった。そして、支援者らはAがこだわることや自己本位に見える言動をAの性格の怠惰と見なし、障害特性に合わない不適切な支援を行ってきた。もし、アスペルガー症候群のAとして「こだわり」や「障害特性」に考慮し適切に支援が展開されていたならば、Aの二次障害の長期化を回避できた可能性がある。

これらを踏まえて、アスペルガー症候群の人の一次障害を適切にアセスメントすることは、支援の重要なポイントだといえる。重度の自閉症障害のケースと知的発達レベルの高いアスペルガー症候群のケースとでは、一次障害に対する認識、すなわち、それらを踏まえた支援がなされるか否かは多少なりとも差が生じている。アスペルガー症候群の人の、軽度ゆえに軽視される一次障害をいかにアセスメントし支援に反映させていくが、二次障害を防ぐ鍵だといえる。

参考文献

1）ローナウィング「自閉症スペクトル」東京書籍、1998

2）内山登紀夫・水野薫・吉田友子「高機能自閉症・アスペルガー症候群入門」中央法規、2002

3）佐々木正美「アスペルガー症候群・高機能自閉症」子育て協会、2000

4）国際治療教育研究所編「問題行動のあるアスペルガー症候群の人へのアプローチ」2007

「知的障害のある人の地域生活移行過程における満足度の把握に関する研究」

国立重度知的障害者総合施設のぞみの園／院後期３年

森地　　徹

国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

村岡　美幸

１．はじめに

日本における知的障害のある人の地域生活への移行は、数値目標を掲げて取り組んでいるいくつかの施設[1]を除いて本格化されている段階とはなっていない。また、日本において知的障害のある人の地域生活への移行に関する研究はほとんど行われていない。そこで本研究は、長期間に渡り同一施設に入所していた施設入所者が地域に根ざした住居に移行した群(地域群)と施設に残留した群(施設群)とで生活満足度にどのような違いが生じるのかを明らかにするため、地域群と施設群との居住形態ごとの生活満足度の違いを調査し両群の比較を行うこととする。

２．目的

地域生活への移行が移行者に及ぼす影響のうち、特に居住環境の違いが移行者の主観的満足度にどのような影響を及ぼすのか、地域に根ざした住居に移行した群(地域群)と施設に残留した群(施設群)との生活満足度の違いについて比較分析を行うことで明確にすることを本研究の目的とする。

３．対象

同一施設に長期間入所している施設入所者で、地域に根ざした住居に移行した群(地域群)28名と施設で地域生活をするための支援を受けている群(施設群)45名を対象とした。対象のうち、重度或いは重複障害のため回答が困難なもの及び回答を拒否したものを除いて調査を実施した。有効回答数は地域に根ざした住居に移住した群が24名(回答

[1] 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園、宮城県社会福祉事業団(現在は宮城県社会福祉協議会)宮城県船形コロニー、長野県社会福祉事業団西駒郷 (峰島，2004) など。

率85.7%)(男性11名・女性13名、平均年齢56.8歳、平均IQ36、平均入所年数32.0年)、施設内で地域生活に移行するための支援を受けている群が36名(回答率80.0%)(男性19名・女性17名、平均年齢55.1歳、平均IQ29、平均入所年数29.3年)であり、両群の属性に有意差は見られなかった。

４．方法

知的障害のある人の居住環境と支援に関する主観的満足度を測定するために、Heal等によって開発されたThe Lifestyle Satisfaction Scale(LSS)の尺度項目28項目を用いた(Heal et al，1985)(表1)。そして、地域群施設群両群ともに尺度項目ごとに聞き取り調査を行い、「肯定的意見」、「どちらともいえない・わからない」、「否定的意見」をそれぞれ得点化し分析を行った。また、それぞれの居住形態において実際に受けている支援内容を考慮して、「自由時間(free time)」を「休みの日」に、「歯科医(dentist)」を「診療所」に、「洗濯施設(laundry facility)」を「洗濯をしてもらうこと」に、「タクシーサービ

表１　LSS尺度項目

1. ここに住んでみてどうですか？
2. 住むのにもっと良い場所がありますか？
3. ここに住む前はどこに住んでいましたか？前に住んでいた場所が場所が良いですか？ここが良いですか？
4. ここでの食事はおいしいですか？
5. 食事がもっとおいしい場所はありますか？それはどこですか？
6. ここでは誰と一緒ですか？誰かと一緒が良いですか？１人が良いですか？
7. 誰かと一緒に住みたいですか？
8. この辺りのことが好きですか？
9. 住むのにもっと良い地域がありますか？
10. 休みの日にすることは楽しいですか？
11. 休みの日にすることはありますか？
12. 休みの日をもっと楽しみたいですか？
13. 友達はいますか？
14. 友達が欲しいですか？
15. もっと友達ができるところがありますか？
16. 友達と会っていますか？
17. 支援者のことが好きですか？
18. 診療所で診てもらうのは好きですか？
19. 洗濯をしてもらうのは好きですか？
20. バスや車に乗って出かけるのは好きですか？
21. この辺の食料品店やその他のお店に行くのは好きですか？
22. クラブ活動をしていますか？クラブ活動は好きですか？クラブ活動をしたいですか？
23. 仕事がありますか？仕事は好きですか？仕事をしたいですか？
24. 診療所で診てもらったり、バスや車に乗って出かけたり、お店で買い物をしたりすることをサービスと言います。サービスは好きですか？
25. ここでの約束は何ですか？その約束が好きですか？
26. 別の約束はありますか？その約束が好きですか？
27. ここに住むのが好きですか？
28. 前に住んでいた場所に戻りたいですか？

ス(taxi service)」を「バスや車に乗って出かけること」に、「講義(classes)」を「クラブ活動」にそれぞれ置き換えた(表1)。

5．調査期間

調査は2007年10月から12月にかけて行った。

6．結果

1）単純集計結果

肯定的な意見として多くあげられていたものは、地域群では「食事がおいしい」が87.5%、「仕事が好き」が87.5%、「友達がいる」が87%、「今の場所に住んで良かった」が83.3%、「住んでいる地域が良い」が83.3%、「休みの日にすることが楽しい」が83.3%、「支援者のことが好き」が83.3%、「バスや車に乗って出かけるのが好き」が83.3%、「住む場所での約束事が好き」が83.3%、「前に住んでいたところに戻りたくない」が83.3%であった(表2)。一方施設群では、「お店に行くのが好き」が94.4%、「食事がおいしい」が91.7%、「バスや車に乗って出

表２　単純集計結果

項　　目		地域群 (n=24)	施設群 (n=36)
1. 今の場所に住んでみてどうか	満足	21(83.3%)	30(83.3%)
	どちらともいえない	2(8.3%)	5(13.9%)
	不満	1(4.2%)	1(2.8%)
2. 住むのにもっと良い場所があるか	ない	5(20.8%)	11(30.6%)
	どちらともいえない	8(33.3%)	13(36.1%)
	ある	11(45.8%)	12(33.3%)
3. 前の場所が良いか・今の場所が良いか	今の場所が良い	14(58.3%)	23(63.9%)
	どちらともいえない	6(25%)	7(19.4%)
	前の場所が良い	4(16.7%)	6(16.7%)
4. 食事はおいしい	おいしい	21(87.5%)	33(91.7%)
	どちらともいえない	1(4.2%)	1(2.8%)
	おいしくない	2(8.3%)	2(5.6%)
5. もっと食事がおいしい場所があるか	ない	7(33.3%)	14(41.2%)
	どちらともいえない	6(28.6%)	7(19.4%)
	ある	8(38.1%)	13(38.2%)
6. 部屋は１人が良いか	１人が良い	18(75%)	10(28.6%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	8(22.9%)
	誰かと一緒が良い	3(12.5%)	17(48.6%)
7. 誰かと一緒に暮らしたいか	１人で暮らしたい	16(66.7%)	11(32.4%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	7(20.6%)
	誰かと一緒に暮らしたい	5(20.8%)	16(47.1%)
8. 住んでいる地域はどうか	良い	20(83.3%)	21(58.3%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	13(36.1%)
	悪い	1(4.2%)	2(5.6%)
9. 住むのにもっと良い地域があるか	ない	8(33.3%)	6(17.6%)
	どちらともいえない	6(25%)	17(50%)
	ある	10(41.7%)	11(32.4%)
10. 休みの日にすることは楽しいか	楽しい	20(83.3%)	26(72.2%)
	どちらともいえない	4(16.7%)	8(22.2%)
	楽しくない	0(0%)	2(5.6%)

項　　目		地域群 (n=24)	施設群 (n=36)
11. 休みの日にすることはあるか	ある	14(58.3%)	20(55.6%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	8(22.2%)
	ない	7(29.2%)	8(22.2%)
12. 休みの日をもっと楽しみたいか	今のままで良い	9(37.5%)	8(22.2%)
	どちらともいえない	5(20.8%)	10(27.8%)
	もっと楽しみたい	10(41.7%)	18(50%)
13. 友達がいるか	いる	20(87%)	24(70.6%)
	どちらともいえない	2(8.7%)	5(14.7%)
	いない	1(4.3%)	5(14.7%)
14. 友達が欲しいか	今のままで良い	10(41.7%)	8(22.9%)
	どちらともいえない	2(8.3%)	8(22.9%)
	欲しい	12(50%)	19(54.3%)
15. もっと友達ができる場所があるか	ない	7(29.2%)	5(13.9%)
	どちらともいえない	6(25%)	16(44.4%)
	ある	11(45.8%)	15(41.7%)
16. 友達と会うことができるか	できる	17(70.8%)	23(63.9%)
	どちらともいえない	4(16.7%)	10(27.8%)
	できない	3(12.5%)	3(8.3%)
17. 支援者のことが好きか	好き	20(83.3%)	27(77.1%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	7(20%)
	嫌い	1(4.2%)	1(2.9%)
18. 診療所で診てもらうのは好きか	好き	16(66.7%)	25(69.4%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	5(13.9%)
	嫌い	5(20.8%)	6(16.7%)
19. 洗濯をしてもらうのは好きか	好き	6(25%)	23(63.9%)
	どちらともいえない	4(16.7%)	9(25%)
	嫌い	14(58.3%)	4(11.1%)
20. バスや車に乗って出かけるのは好きか	好き	20(83.3%)	31(86.1%)
	どちらともいえない	2(8.3%)	4(11.1%)
	嫌い	2(8.3%)	1(2.8%)
21. お店に行くのが好きか	好き	18(75%)	34(94.4%)
	どちらともいえない	4(16.7%)	2(5.6%)
	嫌い	2(8.3%)	0(0%)
22. クラブ活動は好きか	好き	17(70.8%)	24(66.7%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	9(25%)
	嫌い	4(16.7%)	3(8.3%)
23. 仕事は好きか	好き	21(87.5%)	30(83.3%)
	どちらともいえない	2(8.3%)	4(11.1%)
	嫌い	1(4.2%)	2(5.6%)
24. サービスを利用するのは好きか	好き	19(79.2%)	28(80%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	6(17.1%)
	嫌い	2(8.3%)	1(8.6%)

項　　目		地域群 (n=24)	施設群 (n=36)
25. 住む場所での約束事が好きか	好き	20(83.3%)	23(65.7%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	9(25.7%)
	嫌い	1(4.2%)	3(8.6%)
26. 他の約束事は好きか	好き	19(79.2%)	21(58.3%)
	どちらともいえない	4(16.7%)	14(38.9%)
	嫌い	1(4.2%)	1(2.8%)
27. 今の場所に住むのは好きか	好き	17(70.8%)	31(86.1%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	2(5.6%)
	嫌い	4(16.7%)	3(8.3%)
28. 前に住んでいた所に戻りたいか	戻りたくない	20(83.3%)	22(61.1%)
	どちらともいえない	3(12.5%)	7(19.4%)
	戻りたい	1(4.2%)	7(19.4%)

かけるのが好き」が86.1%、「今の場所に住むのが好き」が86.1%、「今の場所に住んで良かった」が83.3%、「仕事が好き」が83.3%、「サービスを利用するのが好き」が80%であった(表2)。

これらのことから、地域群施設群両群とも「今の場所に住んで良かった」としており現在の居住場所に満足している様子がうかがえる。その中でも特に地域群は「住んでいる地域が良い」としており、居住環境全般に満足している様子がうかがえる。施設群では「今の場所に住むのが好き」としており現在の居住場所に満足している様子がここからもうかがえる。しかし、地域群が「前に住んでいたところに戻りたくない」としていることから、地域での生活を経験することで居住環境としては地域での生活が望ましいという傾向に至る傾向がうかがえる。

2) t検定結果

「肯定的意見」に3点、「どちらともいえない・わからない」に2点、「否定的意見」に1点をそれぞれ付け、各項目の得点の平均点について、地域群、施設群の2群間でのt検定を行った。その結果、地域群施設群両群の間に「部屋は一人が良いか」、「洗濯をしてもらうのが好きか」($P<0.01$)、「誰かと一緒に住みたいか」、「お店に行くのが好きか」、「前に住んでいた所に戻りたいか」($p<0.05$)の設問でそれぞれ有意差が見られた(表3)。

これらのことから、地域群は施設群よりも「部屋は1人が良い」、「1人で暮らしたい」というように、より個別の生活を志向する向きが強く見ら

表3　t検定結果

	地域群 (n=24)	施設群 (n=36)	df	t
今の場所に住んで満足	2.83	2.80	48.398	.222
住むのにもっと良い場所はない	1.75	1.97	50.136	-1.053
今の場所に住むのが良い	2.16	2.47	49.383	-.272
食事がおいしい	2.79	2.86	42.941	-.479
もっと食事がおいしい場所はない	1.95	2.02	43.976	-.315
部屋は1人が良い	2.62	1.80	55.097	3.998**
1人で暮らしたい	2.45	1.85	51.701	2.647*
住んでいる地域が良い	2.79	2.52	54.949	1.817

	地域群 (n=24)	施設群 (n=36)	df	t
住むのにもっと良い地域はない	1.91	1.85	42.331	.295
休みの日にすることは楽しい	2.83	2.66	57.982	1.366
休みの日にすることがある	2.29	2.33	46.240	-.180
休みの日は今のままで良い	19.5	17.2	45.666	1.028
友だちがいる	2.82	2.55	54.978	1.631
友だちは今のままで良い	1.91	1.68	44.270	.948
もっと友だちのできるところはない	1.83	1.72	42.135	.523
友だちと会うことができる	2.58	2.55	46.133	.152
支援者のことが好き	2.79	2.74	49.355	.363
診療所で診てもらうのが好き	2.45	2.52	46.893	-.325
洗濯をしてもらうのが好き	1.66	2.52	41.898	-4.065**
バスや車に乗って出かけるのが好き	2.75	2.83	39.234	.568
お店に行くのが好き	2.66	2.88	27.119	-2.047*
クラブ活動が好き	2.54	2.58	43.148	-.217
仕事が好き	2.83	2.88	53.195	.417
サービスを利用するのが好き	2.70	2.77	41.549	-.415
住む場所での約束事が好き	2.79	2.57	56.017	1.451
他の約束事が好き	2.75	2.55	51.071	1.3611
今の場所に住むのが好き	2.54	2.77	54.167	.097
前に住んでいた所に戻りたくない	2.79	2.41	57.879	2.208*

れ、「前に住んでいた所には戻りたくない」というように、移住する前に住んでいた所には戻りたくないという傾向が施設群よりも強く見られた。

3）数量化Ⅲ類結果

各項目の分類を行うために、数量化Ⅲ類を用いて地域群と施設群の両群の項目を分類した。その際、地域群施設群どちらかに７割以上の偏りが見られるものを除いて分類を行った。そして、18項目で地域群施設群どちらかで７割以上の偏りが見られたので、それらを除いた10項目について分類を行った。

その結果、カテゴリースコアにおいて固有値上１軸での解釈を行うことが望ましいため、１軸での解釈を行うと、「部屋は１人が良い」、「１人で暮らしたい」といった項目が軸のマイナス方向に、「誰かと一緒に住みたい」、「部屋は誰かと一緒が良い」といった項目が軸のプラス方向に、それぞれかたまっているため、１軸上のマイナス方向を「個人での生活が良いというカテゴリー」、プラス方向を「集団での生活が良いというカテゴリー」として軸の意味づけを行った(図１)。

そして、カテゴリースコアにより意味づけをした軸に個人スコアを重ね合わせると、マイナス方向の「個人での生活が良い」という方向に地域群、プラス方向の「集団での生活が良い」という方向に施設群がそれぞれ位置付く結果となった(図２)。

これらの結果から、地域群施設群両群の態度は大きく２分され、地域群では個人での生活を、施設群では集団での生活を志向する傾向がうかがわれた。

７．考察

地域群施設群両群ともにその多くが「今の場所に住んで良かった」としているが、地域群では施設群よりも「住んでいる地域が良い」、「前に住んでいたところには戻りたくない」という傾向が強く、さらに地域群では「部屋は１人で住みたい」、「１人で暮らしたい」という傾向が施設群よりも強くなっていた。

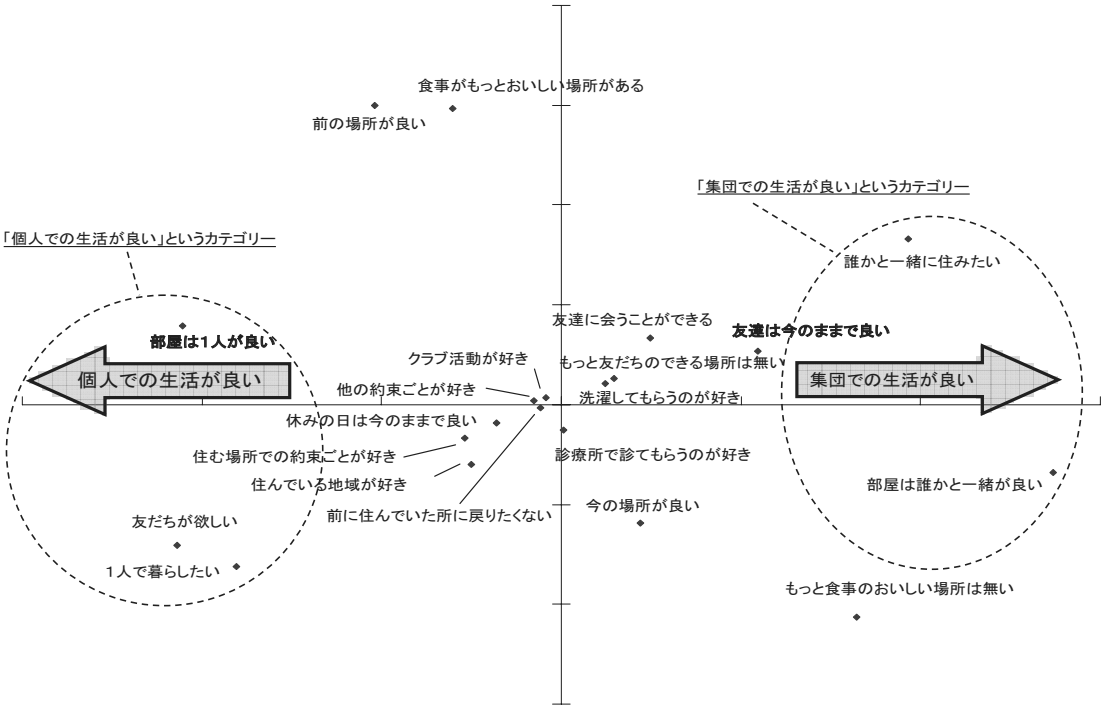

図１　数量化Ⅲ類結果(カテゴリースコア)

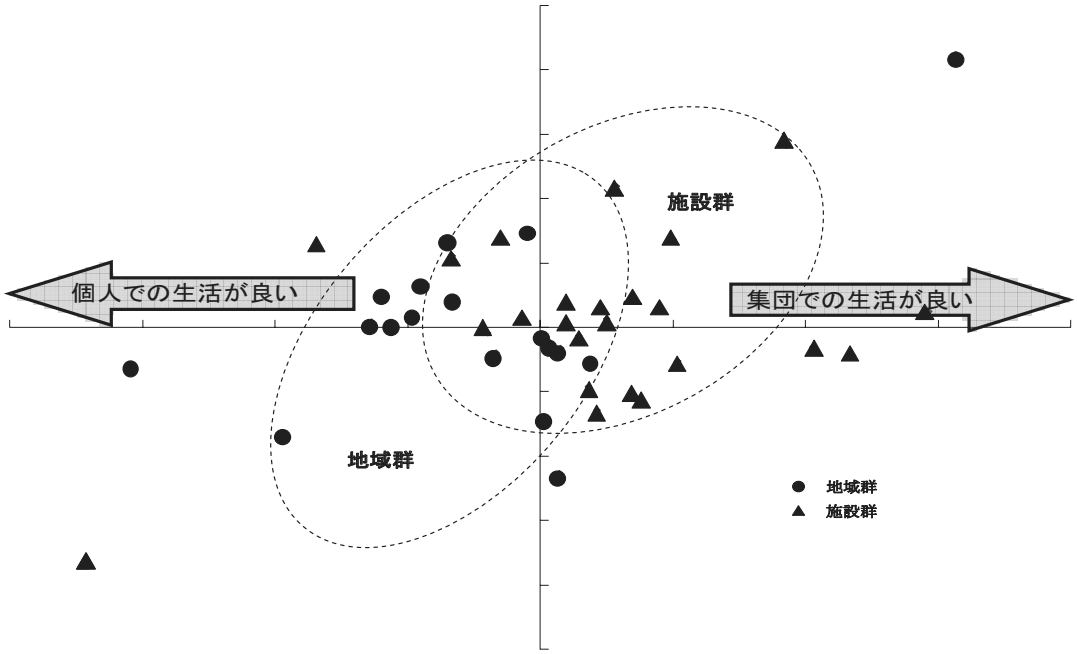

図２　数量化Ⅲ類結果(個人スコア)

これらのことから、地域群施設群両群ともに現在住んでいる場所に満足しているものの、地域群の方が居住地域に対する満足度が高く、プライバシーが守られることを望む傾向にあることがうか

がわれる。この傾向は、１人部屋が確保されプライバシーが守られる生活を経験することで培われたものだと考えられ、地域に根ざした環境の中でプライバシーが守られる生活を経験することで前の暮らしには戻りたくないという傾向が出てきたのだと考えられる。

８．おわりに

本調査結果から、地域に根ざした住居に移住することでプライバシーが確保され、同時に居住地域に対する満足度が高まり、前に住んでいた所には戻りたくなくなる、というような傾向が見られるようになることが明らかになった。今後取り組むべき課題としては、地域のノーマルな生活にいかに近づけるか[2]ということだと考えられる。そのための取り組みを継続して行うことが、地域での生活への定着において必要となると考えられる。

参考文献

・L.W.Heal et al(1985)　The lifestyle Satisfaction Scale (LSS):Assessing Individuals' Satisfaction with Residence, Community Setting, and Associated Services. Applied Research in Mental Retardation 6

・峰島厚(2004)　脱施設化方策の検討　脱施設化計画および脱説化意向調査結果を中心に障害者問題研究 32(1)

・中園康夫(1996)　ノーマリゼーション原理の研究ー欧米の理論と実践　海声社

[2] このことについてベンクト・ニィリエは、地域社会に住むことがそのまま地域に統合されているということではなく、その生活が地域のノーマルな生活にどの程度まで近づけるかが必要だということを指摘している (中園，1996)。

高次脳機能障害者に対するソーシャルワークのアプローチに関する考察

横浜国際福祉専門学校／院前期 2008 年卒

川　村　博　文

１．研究の目的

本研究の目的は、「高次脳機能障害者」に対するソーシャルワークのアプローチが不十分である実態を検証し、問題点の所在と原因、対策と共に、ソーシャルワークに必要な方法と技術を考察することである。

２．研究の背景

「高次脳機能障害(Higher Brain Dysfunction)」は、障害の特性から「隠れた障害(Hidden Disability)」と言われ、身体障害・知的障害・精神障害の対象としても扱うことがされにくい「谷間の障害」として問題が表面化した。特に若年層で身体的麻痺がなく外見上の障害がない場合、法の谷間に置かれることに加え、労災保険や自賠責保険等の後遺障害等級の著しく低い認定など多大な困難が発生し、クローズアップされた。当事者団体の相次ぐ結成や運動の拡がりに対応して、厚生労働省の「高次脳機能障害支援モデル事業」(以下、モデル事業) は 2001 年から 5 年間取り組まれた。成果は、2005 年の障害者雇用促進法改正ではジョブコーチ支援事業に、さらに障害者自立支援法に位置づき、都道府県の広域・専門的支援事業「高次脳機能障害支援普及事業」として、2006 年10月の法全面施行で開始された段階にある。一方で、本研究時において支援拠点設置は20都道府県程度に留まる。各自治体でどのような支援システムを築けるかが注視された段階にある。ところが、「高次脳機能障害」に関する研究は、医学・リハビリテーション分野が圧倒する。かつて、先駆的役割を果たしたソーシャルワーク研究は、現在でも実践報告を含め専門分野の一部に限られる。地域支援が焦点でありながら、「高次脳機能障害者」に対応する一般のソーシャルワーカーのアプローチに関する評価や研究は少ない。本研究の意義はここにある。